ロンギノス 永井康視訳 崇高について

本書のタイトルにいう「崇高」とは、文体の崇高さをさし、卓越した表現、訳者の説明を借りれば「聞き手（読者）の心を完全にとらえ、いつまでも心に思い起させ、『偉大な精神』へと導き、いつの時代にでも、誰にでも好かれる表現のもつ性質」の意味である。

著者ロンギノスについては、本書が一五五四年、F. Robertello によって出版されていらい、後三世紀の弁論家カッシオス・ロンギノスに同定された時期があったが、とくに一九世紀のはじめから批判検討がかさねられた結果、今日では後一世紀頃のある人物と推測されるのみで、確かなことはわからない。

しかし著者の詮索はともかくとして、この断章ははやくから世の注目するところとなり、ヨーロッパのほとんどすべての国で、さまざまな版、多くの翻訳が公刊され、一八世紀イギリス文学やゲーテ、シラーなどの近代西欧文学、あるいは文学批評や美学理論に大きな影響をあたえてきた。

本書において著者はまず、文体の崇高さが学んで身につけることができるものなのかどうかを問い、生得の才能は必要だが、それが発揮されるためには技術（テクネー）が有用であるとする。さらに、崇高偉大を志す者が陥りやすい過失を列挙したあと、著者は「崇高な表現を最もよく産み出す源泉ともいうべきもの」を五つ示す。㈠偉大な精神（パトス）、㈡烈しい霊感にみたされた感動、㈢文の彩（スケーマタ）、㈣高貴なことばづかい（ファンタシス）、㈤気品の高い文の構成（シュンタクシス）、がそれであり、かくて本論では、これら源泉とさるべき要件について、ホメロス、ヘロドトス、プラトン、デモステネスをはじめ、人数にして五〇人におよび、年代にして一千年にわたる著作家たちの作品から、豊富な実例を引用しつつ、吟味が展開される。本質にせまる洞察力、文学に対する力強い情熱、その健全さ、独創性、批判の公平さなどは、本書についてすでに多くの人が指摘しており、そこに、この断章が古典古代におけるもっともすぐれた文学論のひとつとされる理由がある。本書はまた、その質性上、古代弁論術を語るうえで欠くことのできぬ体系的な書物として、とくに重要な位置を占めるものである。

われわれはすでに、青木巌氏による秀訳（ロンギノス「文学論」、『ソフィア』10巻1・2号）をもっているが、翻訳というもののならいとして、訳文はよりわかりやすく明晰になっているし、D. A. Russel, 'Longinus' On the Sublime, Oxford 1964 その他の新しい研究成果をも摂取されている点、よろこぶべき出版である。また本訳書の特色のひとつは、弁論術上のタームをタームとして明瞭にするよう意を用いてあることで、訳語としては例えばファンタシアーという語のあつかいなどにそれをみることができようし、索引に付された語義の懇切な説明も、そのあらわれということができよう。その意味で、古代弁論術の好個の入門書ともなっている。

（A5判 一一九＋一六頁 昭和四五年四月 バッカイ舎刊 定価六五〇円）

（大戸千之）